

St. Luke's International University Repository

Partnerships between Fertility Nurses and Self-help Groups in Britain to Support Coping with Infertility.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子, 清水, 清美, 川元, 美里, 桃井, 雅子, 永森, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/1318

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英国の不妊当事者サポートにおける 生殖看護師と自助グループの協働

森 明子¹⁾ 清水 清美²⁾ 川元 美里³⁾
桃井 雅子¹⁾ 永森久美子¹⁾

Partnerships between Fertility Nurses and Self-help Groups in Britain to Support Coping with Infertility

Akiko MORI, RN, NM, PhD¹⁾ Kiyomi SHIMIZU, RN, NM, MN²⁾ Misato KAWAMOTO, RN, NM³⁾
Masako MOMOI, RN, NM, PhD¹⁾ Kumiko NAGAMORI, RN, NM, MN¹⁾

[Abstract]

The Fertility Care Project is a women-centered care initiative that is part of the St. Luke's College of Nursing 21st Century COE Program, a nursing project that aims to produce health through people-centered care (citizens take the lead in care). The project helps women experiencing infertility to cope with the stress and decisions that accompany fertility treatments by providing appropriate information and support. This new research model promotes a continuous cooperative system and organization by encouraging the creation of an environment in the community involving partnerships with fellow citizens and health care specialists, sharing with one another, and unity, and also includes improving quality in the nursing profession.

The purpose of this study is to present the activities of fertility nurses and infertility self-help groups in Britain that support those experiencing infertility, their partnerships, and the education of the fertility nurses. Referencing this school's COE Fertility Care Project activities, this research will examine implications for future activities in Japan.

The study method involved comparing the COE Fertility Care Project activities with the fertility nurses and self-help groups in Britain on the following 2 points: 1. In what manner the nurses and participants interact during the support, and 2. How the education that enhances the nurses' expertise is being carried out.

The results reveal that in the support care model, consultations, creation of informative and educational materials, support of interactive meetings, and a bulletin board system (BBS) on the Web are offered. The COE Fertility Care Project activities include direct consultation with participants, creation of educational materials in partnership with self-help groups, and holding interactive meetings through the outreach model. Activities not implemented by the British fertility nurses are noted to be those that are easily carried out because of college faculty. On the one hand, consultations with a named nurse and participatory interactive exchanges with couples expecting twins are not common in Japan, but were examined as a necessary future model. In both countries, educational programs for fertility nurses are organized that directly relate the experiences of those who experience infertility and lecture from their perspective. Those coping with infertility also gave the educational programs high marks.

[Key words] Britain, fertility nurses, self-help groups, donor insemination, multiple pregnancies

1) 聖路加看護大学 母性看護学・助産学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Nursing & Midwifery

2) 保健医療福祉大学 International University of Health and Welfare, ODAWARA Reproductive Health Nursing

3) 聖路加看護大学大学院博士前期課程 St. Luke's College of Nursing, Master's Course

[要 旨]

聖路加看護大学21世紀 COE プログラム Women-Centered Care 不妊ケアプロジェクトでは、市民主導の健康生成をめざす看護（市民が主人公のケア：People-Centered Care）の拠点として、不妊に悩む女性たちが適切な情報とサポートのもとで不妊治療に伴うストレスや選択に対処することができるよう、看護専門職の質の向上を含む、コミュニティにおける環境づくりの推進、市民やヘルスケア専門家のパートナーシップやわかちあい、調和などにより継続的に協力体制や組織化を進める新しいケアモデルの研究を進めている。

本研究の目的は、英国における不妊当事者のサポートにおける生殖看護師と当事者グループの活動ならびに両者の協働、そして生殖看護師の教育について記述し、本学 COE 不妊ケアプロジェクトの活動を位置づけ、今後の日本での活動への示唆を検討する。

研究方法は、英国の生殖看護師と当事者グループに対し、1. 当事者サポートに看護師と当事者はどのようにかかわりあっているか、2. 看護師の専門性を高める教育がどのように行われているかの2点について、COE 不妊ケアプロジェクトの活動と比較検討した。

結果は、当事者サポートのケアモデルには、コンサルテーション、情報資料や教材の作成、交流会の実施や支援、Web ページでの BBS の提供があった。当事者に対する直接的なコンサルテーション、当事者グループとの協働による教材の作成やアウトリーチモデルによる交流会の開催などを行った COE 不妊ケアプロジェクトの活動は、英国の生殖看護師の活動には見られないもので、大学教員ゆえに取り組みやすい活動として位置づけられた。

一方、指名の看護師（named nurse）によるコンサルテーションや体験者参加型の双胎妊娠カップルの交流会は、日本にはほとんど見当たらないが、今後必要なモデルとして検討できた。また、生殖看護師の教育において、当事者の体験を直接伝え、当事者の立場で講演するプログラムを組むことについては両国で行われており、当事者からも高く評価されていた。

[キーワード] 英国、生殖看護師、自助グループ、非配偶者間人工授精、多胎妊娠

I. はじめに

聖路加看護大学21世紀 COE プログラム（2003 - 2007年）は、市民主導の健康生成をめざす看護（市民が主人公のケア：People-Centered Care）の拠点として、市民やヘルスケアの専門家が健康課題の解決やより健やかなコミュニティづくりに向けて、パートナーシップやわかちあい、調和などにより継続的に協力体制や組織化を進める新しいアプローチの開発を目的とした¹⁾。この目的に鑑み、Women-Centered Care 不妊ケアプロジェクトでは、不妊に悩む女性たちがそれぞれの人生や生活を大切にしながら、適切な情報とサポートのもとで不妊治療に伴うストレスや選択に対処することができるよう、看護専門職の質の向上を含む、コミュニティにおける環境づくりを推進することを目標とし²⁾、活動を進めていった。市民グループである不妊当事者グループをパートナーとした5年間にわたるプロジェクトの活動は、他の専門職や自治体などの協力のもと、市民・当事者に役立てるためのさまざまなプロダクト（フォーラムやセミナー開催、小冊子、アウトリーチモデル、ネットワークなど）を生み出すことができた。

プログラム最終年の活動をより充実したものにし、また、これまでの活動を評価し、COE 終了後の不妊ケア

プロジェクトの活動継続について模索するため、生殖看護に関し先進的な英国への視察を行った。

本稿では、英国における不妊当事者と生殖看護師の活動ならびに両者の協働、そして生殖看護師の教育から、本学 COE 不妊ケアプロジェクトの活動を振り返り、今後の活動への示唆を検討したので報告する。

II. 研究方法

2007年3月25日から同年同月31日まで、ロンドンを拠点に、パーミンガム、オックスフォードを訪問し、訪問先で多くの情報を得た。協力者は、われわれの訪問の目的を理解し、応じてくれた人々・組織である。主な協力者は、Royal College of Nursing（以下 RCN）本部助産ウイメンズヘルス部門アドバイザーのキャロライン・バサク Carolyn Basak, RCN の Fertility Nurse Group（以下 FNG）議長のキャロル・ウィルソン Carol Wilson, Multiple Birth Foundation（以下 MBF）のジェーン・デントン Jane Denton, パーミンガムにある Midland Fertility Services（以下 MFS）のハイジ・パーチ Heidi Birch, オックスフォードにある John Radcliffe Maternity Hospital 内 Oxford Fertility Unit（以下 OFU）のデビー・バーバー Debbie Barber, ロンドン拠点の当事者グループ Donor Conception

Network (以下 DC Network) 主宰者オリビア・モナッシュ Olivia Montuschi である。

不妊ケアプロジェクトで行ってきた活動を振り返るため、1. 当事者サポートに看護師と当事者はどのようにかわりあっているか、2. 看護師の専門性を高める教育がどのように行われているかの2点について、情報を集約し、分析した。

III. 結果

1. 当事者サポートに看護師と当事者はどのようにかわりあっているか

1) コンサルテーションと named nurse

FNG は、当事者グループから医学的な質問があったときに答えたり、相談があったときには無料でコンサルテーションに応じているとのことだった。FNG 以外には、Human Fertilization and Embryology Authority (以下 HFEA), British Fertility Society (以下 BFS) が専門団体として当事者を支援している。

1993年から毎年6月に国の不妊週間 (National Fertility Week) が設けられているが、この活動の軸にあるのが National Infertility Awareness Campaign (NIAC) である。NIAC は、イーストサセックスに本部を置く不妊当事者グループ Infertility Network UK が中心となり、患者サポートグループ、保健医療従事者、製薬会社などからのメンバーで構成されている。看護師も1名参加しており、年1回のイベントには FNG メンバーも招かれていた。

クリニックレベルでのコンサルテーションについて特筆すべきだったのは、MFS の named nurse のシステムである。MFS はパーミンガム郊外の商店街の一角にあるビルディングの中にあり、そのフロアを占める不妊治療専門のクリニックである。年間954周期の体外受精が行われている³⁾。患者カップルが受診すると初回時から、その患者の named nurse (初回のコンサルテーションから担当するプライマリナースもしくはセコンダリナースのことで、初回時に名刺をカップルに渡している) が継続してケアするシステムになっていた。患者からの質問は E メールでも受け付けており、その回答も named nurse が行う。named nurse がいるということ、これは MFS がとても看護師を重視する (nurse-oriented) クリニックであることを物語っており、英国でもすべてのクリニックがそうとは限らないとのことだった。現在、助産師を含む看護職が9名勤務しており、多忙な臨床であるが、初回時から継続的にかかわることでカップルと親密な関係が築かれていた。

2) ウェブサイトによる患者間交流の機会の提供

MFS では、患者が広域から通院して来ているため、集まって一緒に何かを行うというやり方はたいへんで

きないということで、ウェブサイトの掲示板 (以下 BBS) を作り、患者に提供していた。患者はここで互いにサポートし合うという。その管理・運営は、クリニックの職員のモジュレーター2名が担当していた。掲示板の模様を画面で見せてもらったところ、312人の書き込みがあった。そして、患者に対して、すべての情報はウェブサイト上で提供しており、リーフレットはすべてダウンロードでき、ニュースレターも読めるようになっていた。また、患者からの質問を E メールで受け付けていた。このようなウェブサイトの運営は、日本の専門クリニックでもしばしば見られ、めずらしいことではない。

3) 治療経験者がサポートする患者交流会

OFU は、オックスフォード近郊の John Radcliffe Maternity Hospital 内にある。このマタニティ病院は年間6,000件の分娩があるとのことだった。OFU は不妊治療専門の部門で、年間1,020周期の体外受精が行われている。OFU には、“Friends of IVF” (以下 FIVF) という交流会がある。IVF とは、In Vitro Fertilization (体外受精) を指す。2カ月に1回、夜に会合が開かれており、定期的にニュースレター「F-IVF News」を発行している。委員会組織によって運営されている。運営メンバーの中にはまだ子どものいないカップルもいるようだが、多くは、すでに子どもを得たカップルである。治療がうまくいって生まれたり、自然妊娠したり、あるいは養子縁組によるものだ。いずれにしても OFU で治療を経験したことのあるカップルたちが会の運営に携わっている。また、クリニックとの連絡役として、培養室科学者の一人がかかわっている。クリニックが患者に渡している資料の中にも FIVF についての案内が明記されている。OFU は、単独のクリニックである MFS と異なり、同じ病院で出産ケアが受けられる点が治療後の患者間の凝集性を高め、このような会を生まれやすくしたのかもしれない。

ニュースレターには、治療で悩んだ時に利用してもらおうと、ヘルプラインを担当する複数のカップルの名前と電話番号が、いつどんな治療を何回行って子どもが生まれたかといった具体的な紹介とともに書かれている。日本にも患者会のあるクリニックはあるけれど、カップル単位で個人的な背景を文書に開示してサポートに乗り出すオープンさは、ほとんど目につくことがない。ニュースレター2006年の春号には、代表者が OFU の新ビルディング構想において、患者サポートのための“ドロップ・イン・センター (drop-in centre)”を作ることを希望しており、資金が必要なので、そのために開催するイベントの計画と参加への呼びかけが書かれていた。

看護スタッフからみて、実際、当事者が会を運営・維持するということはなかなかたいへんで、彼らのモチベーションが高くないと継続できないと話していた。オープンな土壌があっても運営維持には難しい側面がありそう

な気配が感じられた。

4) 経験者参加型の多胎出産教育

MBF は、ロンドンの Queen Charlotte's & Chelsea Hospital 内にあり、多胎児の妊娠・出産・育児についての専門的なサポートと情報提供を専門家と多胎家族に対して行っている財団である。その活動の一つに、MBF では7週間ごとのウィークディの夜、これから多胎児を出産する予定のカップルや祖父母になる人々に対し、“周産期の会合 (prenatal meeting)” を開いている。すなわち多胎妊娠中のカップルのための両親学級である。ただし、class ではなく、meeting という名称がついていることから交流に力点が置かれているのが特徴だ。

参加する妊娠時期としては、12週未満では早過ぎ、28週を過ぎると身体的にも状況的にも遅いので、20週から24週くらいがよいとのこと。参加者は毎回70名ほどで、カップルでの参加が多いが、女性だけ、男性だけ、祖父母を交えた大家族の参加もあるそうだ。子連れでの参加ももちろんある。2005年度の年次報告によれば、約30%がMBFのある Queen Charlotte's & Chelsea Hospital に通院する妊婦とその家族で、その他、近隣33施設からの参加者があった。広報は、半径50マイル以内の地域の病院や専門家には案内を送り、MBFのホームページで広く周知するというやり方である。参加費は一人£3.00、テキスト代が一冊£3.00である。プログラムの概要は、まず、双子専門助産師 (specialist senior midwife) がテキスト『双子や三つ子に備えること (Preparing for Twins and Triplets)』に沿った内容で、パワーポイントを用いて講義をする。イラストを多く取り扱ったものを使用し、わかりやすくしているとのこと。そして、地域のツインクラブからの双子出産経験者3~5人がパネラーとなって体験を話し、参加者と質疑応答するというスタイルがとられている。体験に基づいて話されるので参加者にとっても役に立ち、友達もできるという。しかし、残念なことに、MBFのような両親学級は他所ではほとんど行われていないようで、遠方においては受けることが難しいようだ。

ちなみに産後のサポートとしては、ヘルス・ビジター (health visitor) が自宅に訪問して具体的な育児や生活の相談 (例えば授乳、成長発達、睡眠、言語発達など) に応じるサービスがある。MBFのホームページでは、三つ子以上の多胎出産予定者は妊娠中にヘルス・ビジターに連絡を取るよう勧めている。

5) 当事者グループからみたナースとの協働

DC Network は提供配偶子 (精子・卵子) によって子どもを得た (得ようとする) カップルのための自助グループである。その主な目的は、両親を支持し案内することであり、その結果、子どもや親子関係にダメージが大きい秘密 (提供配偶子による出生の事実を子どもに隠すこ

と) を避けようとするに置かれている。主宰者は、提供精子による人工授精で2人の子どもを得て、すでに成人に育て上げた女性だ。

DC Network には、現在1,000人以上の家族会員がいるというから大きなグループだ。8歳から12歳までの子どものグループもできているとのこと。子どもたちは告知されており、いろいろなことを理解し始める重要な年齢だとのことで小児心理学者がグループの世話役を務めている。英国では、非配偶者間人工授精 (Donor Insemination: 以下DI) と提供卵子による治療と合わせて約2,000人の子どもが生まれている。ただし、提供卵子によって生まれた子どもは最年長でも13歳で人数も少なく、DIの場合との違いなどについてはまだ言及できる段階ではないとのことだ。この5年間でDIを受ける独身女性は2.5倍、なかでもレズビアン女性では4倍に増えているそうだ。

グループの主な活動は、親のミーティングの企画・開催、子どもへの真実に関する告知や子育てに関する教材の作成・提供、ウェブサイトの運営などである。英国では、2005年4月から法律が変わり、提供配偶子によって生まれた子どもが18歳に達したとき、提供者の身元がわかる情報を入手できるようになった。過去においては、提供者情報の開示に対する抵抗が医療者には見られたが、年々ゆっくり変わってきているとのこと。

親のミーティングの企画に医療者、専門家は関与していない。そのほうが安全だという。自助グループのこれまでの活動経過においてはナースとの関係が難しいことがあったという。ナースも人によると思うが、と一言ことわりを入れた上で、ナースは医学的であり、科学的であって、赤ちゃんを作る (making baby) という考え方が強く、妊娠・出産により家族を形成していく (conception family) という考えが薄いと思うと述べた。さらに、医師と近く、もう少し自立的だとよいと思うとのことだった。もっと私たちから、よい接触をはかっていけばよいのだろう、今後はもっとナースたちに働きかけていきたいと述べていた。このグループの活動の歴史上、どちらかという看護職からよりも心理職からのほうが理解と協力を得やすかったとも話した。しかしながら、最近、看護師の継続教育の機会に自分たちが招かれ、講演を求められたことに対しては高く評価していた。FNGメンバーによる、後述する看護師に対する教育の話からも、ようやく存在を互いに認め合う関係になりつつある段階なのかもしれないと思われた。

6) 患者中心のサービスの考え方と厳しい監査

患者のニーズとウォンツを把握し、満足を得られるケア提供を維持するためには監査が必要であり、MFSとOFUの看護管理者は深くかかわっていたが、いずれの施設においても患者サービス部門を専門に担当する管理

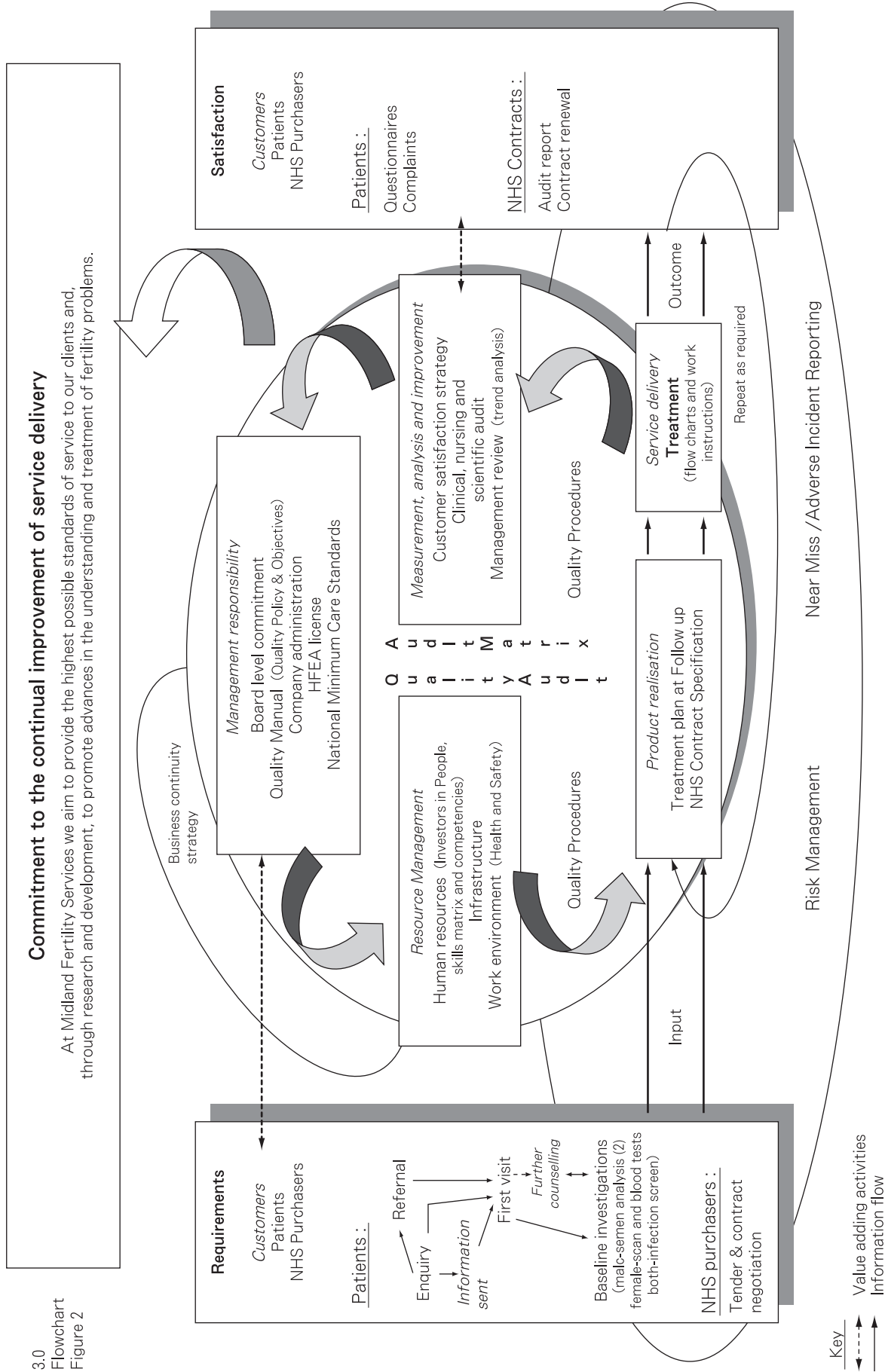


圖 1 Midland Fertility Services

者が配置されていた。HFEAをはじめ、いくつもの監査・査察があり、厳しい条件をクリアしなければならず、規模の小さいクリニックやユニットは喘いでいるとのことだった。MFSでは、British Standards Institute (BSI), HFEA, Health Care Commission, Inventors in Peopleの、4つの監査を受けており、3年ごとのものや年2回行われるものもある。クリニックがサービスを継続的に改善しながら維持していくため、患者サービスにおける要求をインプットとし、患者満足度をアウトプットとする、循環的な管理を図示したフローチャートが作られていた(図1: MFSの許可を得て掲載)。

7) お金という双方の課題

お金の問題は市民、専門職の双方にとって大きいことがわかった。

英国政府のヘルスケア全体の予算では、がんやAIDS/HIVの治療への投資の占める割合が高く、ウィメンズヘルスに対する予算は減らされているとのことだった。ウィメンズヘルスには、不妊を含む性感染症、流産、出生前診断、出産など他にも問題がたくさんあるので困ったことだと受け止められていた。

また、当事者グループの財源も厳しく、活動資金を得るためのロビー活動が活発に行われているとのことだった。

不妊治療費は高額なため、一度に2人産んでしまいたいと双子を希望するカップルが多いとのこと。双子はリスクが高いので、この点が問題になっているということだった。日本では比較的双子のリスクの理解が市民に浸透していることもさることながら、むしろ不妊治療をしたことがわかってしまうから双子は嫌だと世間体を気にする人も多いように感じていたため、社会背景の違いを感じた。前年、開催されたFNGのカンファレンスで、“one for all (すべての女性に対し胚移植は1個だけ)”というトピックが取り上げられていたことを思い出した。多胎予防のこの動きに対し、一律に1個に限定してしまうと若い女性の多胎率は下がるかもしれないが、高齢の女性の妊娠率は下がってしまうのではないかという反論で盛り上がっていた。英国の多胎増加の背景には、治療法自体あるいは医療者の考えなど医療側の要因に加えて、患者側の要因つまり双子を望む患者の意向も背景にあるのかもしれないという新たな認識が芽生えた。

2. 看護師の専門性を高める教育がどのように行われているか

COE不妊ケアプロジェクトでは生殖看護に携わる看護師の教育に重きを置き、日本生殖看護学会(Japanese Society of Fertility Nursing, 以下JSFN)との協働で年次セミナーを行ってきた。英国でもRCN FNGやBFSによる年次カンファレンスなどが行われている。FNGメ

ンバーの一人は、生殖看護師の教育のためにグループを通じて当事者の立場から講演してもらうよう依頼することがあり、看護師の教育上、それは大切なことだと述べていた。また、前述したように当事者グループからもそうした依頼は高く評価され、看護師への信頼を生むきっかけとなっていた。日本でもCOEのセミナーや生殖看護分野の学会で同様の試みが行われており、両国の看護職間の考え方は一致していた。

今年、英国の生殖看護師にとって継続教育にはちょっとした変化があった。RCN FNGとBFSのコラボレーションによる現行教育プログラムに加えて、RCN FNGからの委託でグリニッジ大学のディプロマ&ディグリープログラムに2つのコースが開講されることになったのだ。

前者のFNGとBFSのコラボレーションによるスペシャリスト認定コースは、「不妊カップルの管理 (management of the infertile couple)」「骨盤内超音波検査 (pelvic ultrasound)」「補助を受けた生殖 (assisted reproduction)」「胚移植 (embryo transfer)」の4コース。各コースとも最短6カ月、最長12カ月で終わるようになっており、学会が定めたトレーナーの勤務する指定医療機関でトレーニングを受ける。複数のFNGのメンバーに尋ねてみたが、まだ開始されて間もなく何人かいるの看護師が受けているのか把握していないとのことだった。職場を離れ、トレーニングを受けられる人はそういないだろうという反応だった。英国の生殖看護師の実践は、人工授精と超音波検査による卵胞発育のチェックは一般的で、人によっては胚移植や採卵、精巣生検の技術ももつ。そうした臨床的な役割の拡大は1990年代から急速に進み、看護師による胚移植の妊娠率が他の医療職による場合と変わらないとした1996年の研究論文が大きく影響しており、また、単に技術的な面からだけでなく、ケアの継続性という点でも患者から価値付けられたという⁵⁾。このような業務拡大の変化がこのプログラムの開発を促したのである。

一方、後者の今年開講という生殖看護師向けの学位取得コースは、グリニッジ大学のディプロマ&ディグリープログラム「助産学、小児保健、性の健康 (midwifery, child health and sexual health)」に位置づけられたものだ。「不妊を管理すること (managing infertility)」および「ヒトの生殖を理解すること (understanding human fertility)」の2コースで、ともに大学コーディネーターの指導の下でe-learningで学ぶことができ、15単位(およそ3カ月から6カ月間)となっている⁶⁾。FNGメンバーらは、このコースができたことをとても喜ばしく思っていることが伝わってきた。

以上、生殖医療における当事者サポートと看護師の教育について、今回、英国で得た情報からサポートの現状と組織の関連をまとめ、COE不妊ケアプロジェクトの活動を位置づけた(図2)。

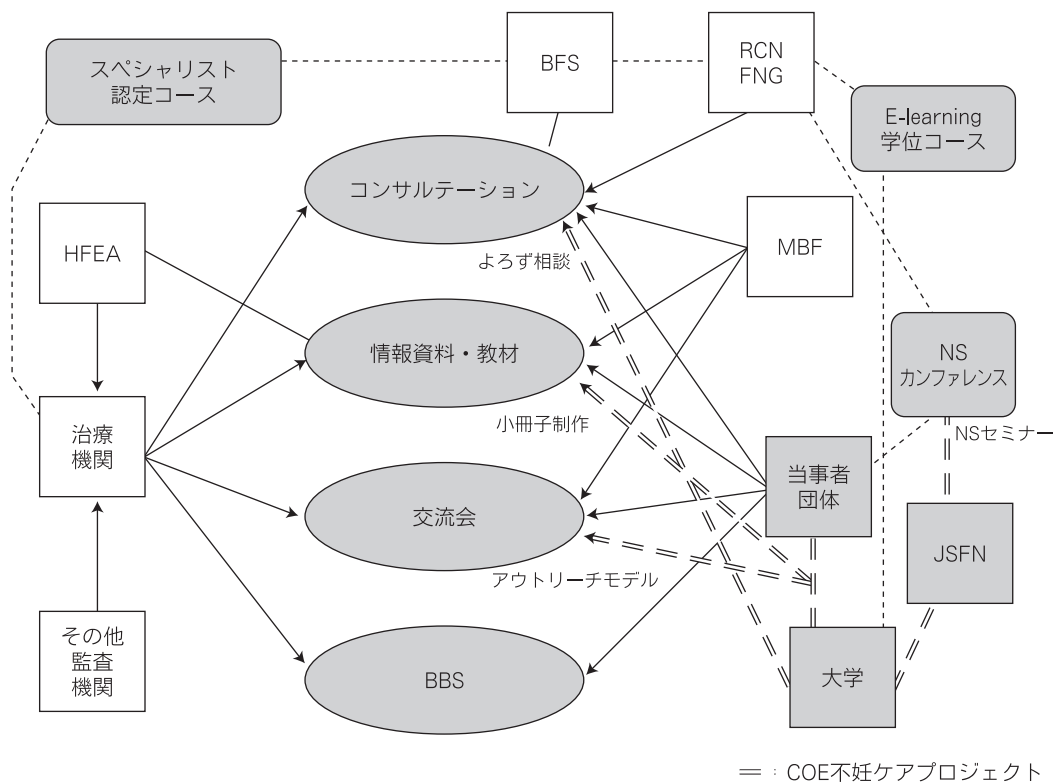


図2 生殖医療における当事者サポートと看護師の教育

IV. 考 察

英国には、日本ではまだあまりみられないか、あっても少ないと思われる2つのケアモデルがみられた。その一つは不妊治療を受けるカップルに対する生殖看護師、named nurse によるプライマリケアである。このやり方にはコンサルテーションの担当者がかなり固定され、継続的に患者をサポートできる利点がある。これを採用している MFS 以外の施設でも、患者からポジティブに評価されている⁷⁾。もう一つのケアモデルは、双胎妊娠カップルのための経験者参加型の交流会の要素の高い両親学級である。双胎・多胎妊娠の頻度からみて産院個々に行うほどニーズはないと思われるが、ある程度の広域で定期的に行われるようになるとよいと考える。これら2つのモデルとも英国でもあまり普及はしていないということだったが、日本でも、今後、これらのケアモデルのシステムを臨床現場あるいはコミュニティに作ること、また、そうなれば named nurse や双子を専門とする助産師・看護師の役割をとることのできる人材を育てる必要が生じると考える。

COE 不妊ケアプロジェクトにあり、英国に見られなかったものは、大学の活動にある。グリニッジ大学は RCN FNG との連携のもと、生殖看護師の教育に寄与している。聖路加看護大学は COE 不妊ケアプロジェクトと JSFN との協働で生殖看護分野の看護師の教育の一翼

を担った。看護師の継続教育という点では共通していた。

しかし、今回、日本でわれわれが行ったような、当事者に対するコンサルテーションや、市民・当事者向けの資料・教材（小冊子）の作成、アウトリーチモデルとして交流会をもちながら全国各地を回るなどの、当事者グループとの協働連携によるケアモデルの創出といった不妊ケアに関する活動は英国の大学には見られなかった。看護師と市民・当事者の双方の視点を取り入れた不妊当事者向けの教材の協働作成は、英国では例がなく、本学 COE 不妊ケアプロジェクトならではの成果であったと考えられる。今後も積極的に検討していくべき課題であると考えられる。

アウトリーチモデルによる活動は、1カ所に固定されないで比較的自由に動け、看護師の実践や教育を総合的、客観的に検討しやすく、コミュニティにおける関連諸機関との連携もはかりやすいなどの大学教員ならではの立場と利点を生かして行うことができる活動であると考えられる。また、COE 不妊ケアプロジェクトでは時間と資金に恵まれたからこそ行うことができたことは否めず、それらが不十分なために先進の英国であっても発展したケアモデルの普及が進まない側面があるように、ケア創生と実現のための財源の確保は今後、大きな課題となると考えられる。関連政府機関や企業との連携なども重要になってくるであろう。

V. まとめ

英国における不妊当事者のサポートをめぐる生殖看護師と当事者グループの活動ならびに両者の協働，そして生殖看護師の教育について情報を収集した。それらの情報からサポートの現状と組織の関連をまとめ，COE 不妊ケアプロジェクトの活動を位置づけ検討した。その結果，大学の活動として，当事者に対する直接的なコンサルテーション，当事者グループとの協働による教材の作成やアウトリーチモデルによる交流会の開催などに英国の生殖看護師の活動には見られない特徴があった。一方，英国には日本ではまだあまり見当たらない named nurse によるコンサルテーションや体験者参加型の双胎妊娠カップルの交流会の実施など取り入れる価値のあるケアモデルが存在した。また，生殖看護師の教育において，当事者の体験を直接伝え，当事者の立場で講演するプログラムを組むことについては両国で行われており，当事者からも高く評価されていた。

引用文献・ウェブサイト

- 1) 聖路加看護大学21世紀 COE プログラム市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点 平成19年度外部評価会資料, i, 2007.
- 2) 1) pp31 - 35.
- 3) HFEA Guide to infertility 2007/2008. HFEA licensed clinics by region. <http://www.hfea.gov.uk/docs/West-Midlands.pdf> [2007/11/01].
- 4) HFEA Guide to infertility 2007/2008. HFEA licensed clinics by region. <http://www.hfea.gov.uk/docs/South-East.pdf> [2007/11/01].
- 5) Ashcroft, S. (2000). Developing the clinical nurse specialist's role in fertility. do patients benefit?. *Human Fertility*. 3. 265-267.
- 6) The University of Greenwich. School of health and social care. CPD course and index. Diplomas and degrees. http://www.gre.ac.uk/schools/health/programmes/cpd/cpd_course_index [2007/11/01]
- 7) 5) p267.